

氏名	大野 恵理
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	甲第 30 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	外国人散在地域における結婚移住女性の「定住」を問い直す —フェミニスト地理学の「ホーム」概念を手掛かりに—
論文審査委員	主 査 教 授 小ヶ谷 千 穂 副 査 教 授 井 上 恵美子 副 査 教 授 諸 橋 泰 樹 副 査 長崎大学准教授 賽 漢 卓 娜

## 論文内容の要旨

本論文は、1980年代以降に日本の外国人散在地域（農村部）に移住した「農村花嫁」や「外国人嫁」と呼ばれた女性たちの移動と居住局面に着目し、移住先社会の様々な領域に埋め込まれた非対称なジェンダー構造を検討しながら、従来の「定住」概念を問い直そうとしたものである。

従来、移民の「定住」は段階的で数値的な指標によってとらえられ、移住先社会の場所性や地域社会に内在する権力関係は不問にされてきた。とりわけ結婚移住女性はその土地に半永久的にとどまるという認識が前提となり、移住先社会への「適応」や統合が先行して検討されてきた傾向が強く、彼女たちがトランスナショナルに「移動する主体」であるという視点は抜け落ちてきた。そこで本論文では、彼らが「移動する主体」であるという視点から、ある空間や場所における社会的カテゴリーや非対称な構造を暴くフェミニスト地理学の「ホーム」概念を手掛かりに、トランスナショナルな空間や居住地域に内在する非対称なジェンダー構造を明らかにし「定住」を考察した。具体的には外国人散在地域というコンテキストの中で、結婚移住女性がどのように居場所を見出し「ホーム」を持つのか、また移住先社会の拠り所となる居場所には、どのような権力関係や構造が埋め込まれているのかという問いのもと、新潟県上越地域の事例を通し検討した。この地域は外国人人口が少なく特定のエスニック集団がまとまって居住しておらず、いわゆる外国人散在地域である。集住地域に比べ日本人住民との交流機会は多いが、裏を返せば、家族を含めた日本人住民との関係性が居住局面に多大な影響をもたらすこととなり、地理的状况も相まって深刻な孤立状態に陥ることも考えられた。

まず序章「結婚移住女性をめぐる国際移動研究」では、移民研究における結婚移住女性の移動に関する先行研究を整理した。移動局面において「移動する主体」としてのモビリティは重視されていた一方で、居住局面ではこの視点による検討が不足しており、「定住」は私的領域における「嫁」役割や滞在資格に規定される受け身的なものとして捉えられ、移住先社会の権力関係は問われず一枚岩的にとらえられてきたという限界をもつことが明らかとなった。そこでこの限界を乗り越えるために、フェミニスト地理学の「ホーム」概念を手掛かりに分析をすすめることとした。この概念は従来ロマンティックな空間とされた「ホーム」とは異なり、女性にとって抑圧や暴力を経験する場所・空間であり、さらに抵抗の場でもあることが提起されたものであり、「ホーム」概念は関係性において不可視化されている社会的構造や空間的なポリティクスを浮上させると指摘されてきた。また移民研究との関連では、移住女性たちが移住先社会のジェンダー構造はもとより、移住先社会と出身社会の二つの空間領域に埋め込まれた不平等や移民がもつ「ホーム」の複数性を明らかにすることが可能となる。上記から本論文ではこの「ホーム」概念を手掛かりにし、公私領域の労働や社会的活動等に視野を広げ移住先社会の空間（場所）性の理解と居場所に潜む権力関係を問うことで、既存の研究の限界を乗り越えることを目指した。

第1章『ムラの国際結婚』の結婚移住女性—農村空間のジェンダーと『ホーム』—では、中山間地（農村）地域における行政主導の「ムラの国際結婚」によって移住したフィリピン女性の移動と居住局面を検討した。まず結婚移住プロセスが一貫してジェンダー化され、農村男性にとって理想化された「ホーム」の実現が意図されたため、極めて依存的な居住支援にとどまっていたことを指摘した。また結婚移住女性は「嫁」として、家父長制的な空間でジェンダー不平等な農業労働や再生産労働役割を引き受け長年にわたり過重労働状態にあったが、その一方で家族から農村の社会的営為を継承していたことが明らかとなった。農村女性による販売活動への参入においては、この社会的営為や蓄積された社会関係資本が有利に作用しており、さらにフィリピンの出身家族の生業である製塩業を家族や住民とともにエスニック・ビジネスとして日比間で展開することを可能としていた。このように「農村の花嫁」であるというローカルなコンテクストは、私的領域ではジェンダー非対称な労働役割を引き受けなければならなかった一方で、公的領域では住民として社会関係資本を蓄積でき、さらに出身家族との紐帯の強化と経済的支援の安定化を実現させていたことが明らかとなった。結婚移住女性は、農村社会のジェンダー構造に取り込まれながらも、ローカルな生活空間における「ホーム」と、トランスナショナルな空間に拡大した「ホーム」を持ち、居住することを明らかにした。

第2章「結婚移住女性の積極的『離脱』—『ホーム』に埋め込まれたジェンダー」では、平野部における台湾女性と韓国女性の「外国人嫁」のライフストーリーを事例に、家父長的空間における「嫁」という立場を超えて社会的活動を通して紡がれる「ホーム」を検討した。彼らは抑圧的な私的領域から「離脱」し、地域の地産地消市場や多文化交流センター（仮名）へと生活空間を拡張した結果、公的領域において地域の支援者や友人女性と出会い、彼らの文化的資源が承認されたことで、社会的ネットワークを得ることができ、言わば地域住民との関係性や活動空間の中に「ホーム」を持ったといえる。しかしその空間にもまたジェンダー非対称な構造が埋め込まれており、彼らはその構造に取り込まれていたことを指摘した。このように「ホーム」は、社会空間の中で新たに獲得されるものであったが、その空間は様々に移住女性を周縁化する軸を内包する「ホーム」であったことを論じた。

第3章「居場所をめぐるモビリティネットワークにおける『ホーム』—」では、移住女性の「ホーム」であるはずのエスニックネットワークから、さらに他の「ホーム」を持つために移住先社会内部を移動するフィリピン女性に着目し、空間に潜むジェンダー構造や社会的規範がいかに関係性に影響を及ぼしているかを考察した。まず支援セクターである宗教的ネットワークは、地域社会のジェンダー規範から逸脱した女性を排除しようとする「噂」により排他的な空間に変わり、それによりネットワークから離脱する者が出たことで分断されたことを明らかにした。次に日本語教室を起点としたエスニックネットワークでは、言語能力の差が対立の境界線となり、移住女性にとっての居場所とはならなかったことを指摘した。社会的統合のために必要とされ移民にとっても重要な人的

資本とされる言語能力が、ネットワーク内では対立を生み出し「ホーム」とはならなかったのである。そして「離脱」した女性たちは、その後ごく限定的な同胞女性や日本人住民と関係を再構築することで、新たな「ホーム」を持つようとしていた。つまり彼女たちはかつて「ホーム」とした場や空間から「離脱」し、まったく別の関係性に新たな「ホーム」を見出そうとしながら居住していたことが明らかとなった。移住後の居住局面においても、常に居心地のいい環境を追い求めモビリティを発揮していたといえるだろう。

以上の検討を踏まえ、終章「外国人散在地域における結婚移住女性の『定住』とは」では全体の議論を整理し、本論文の課題について述べた。外国人散在地域の地域特性が、結婚移住女性に必ずしも「孤立」をもたらすというわけではなく、社会関係資本を活用したり、主体的に「離脱」することによって公的領域に様々に活動範囲を拡大したりしながら、同胞女性を含む居住地域の住民と、ローカルとトランスナショナルな場所や空間においてつながりを築いていた。出身地域や家族のジェンダー規範を内面では維持しつつ、地域社会の既存の規範を自明のものにとらえない視点や言動および長年の居住による地域社会における信頼関係の構築と世代交代により、何よりも「移動する主体」としての彼女たちのモビリティによって、「ホーム」をもち、その空間を居心地のいい空間へと作り替えていくとみることできる。しかしながら、彼女たちの居住が「性的シティズンシップ」に強く規定されているものであり、日本人男性との婚姻による地位が、法的にも経済的にも安定的な滞在に直結しているという制度的要因が、モビリティを行使しようとする行為に対し、少なからぬ影響を及ぼしてもいた。「性的シティズンシップ」がいかにか結婚移住女性を縛り付けるシティズンシップであるかという、居住局面における本質的な課題が浮かび上がったといえる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、フェミニスト地理学における「ホーム」概念を手掛かりとして、特定の地理的・空間的条件の中に埋め込まれたジェンダー関係とそこでの主体のさまざまな抵抗と交渉の形に着目しながら、1980年代から日本にいわゆる「農村花嫁」としてやってきたアジア出身の結婚移住女性の「定住」のあり方を、丹念なフィールドワークにもとづき再検討することを通して、移民研究における「定住」概念をジェンダー視点から再構築するものである。結婚移住女性は、地域社会に居住しながらどのように自らの居場所としての「ホーム」を構築するのか。また移住先社会で構築される「ホーム」にはどのような権力関係や社会構造が埋め込まれているのか。この2つの問いが、新潟県上越地域の事例を通して具体的に明らかにされる。

序章「結婚移住女性をめぐる国際移動研究」では、これまでの移民研究および結婚移民研究が批判的に検討される。従来の移民研究においては、「定住」とは滞在の長期化と同義としてとらえられてきた。特に日本の農村に「花嫁」としてやってきた結婚移住女性たちの「定住」は、私的領域における「嫁」役割や滞在資格に規定される受け身的なものとして議論されるにとどまってきた、と大野氏は批判する。実際には結婚移住女性たちは、滞在の長期化の中で、私的領域にとどまらず地域社会のさまざまなジェンダー関係や権力構造と交渉しながら、自分たちの生存戦略を紡いできた。こうした点に着目する本論文は、フェミニスト地理学の「ホーム」概念を結婚移民研究に導入する。「ホーム」は従来の男性視点の社会科学においては、休息の場であり安心感をもたらすロマンティックな空間とされていたが、フェミニスト地理学によって、女性にとっては抑圧や暴力を経験する場所・空間でもあり、同時に抵抗の場でもあることが明らかにされてきた。本論文は、フェミニスト地理学の「ホーム」概念を用いて、いわゆる外国人散在地域である新潟県上越地域で暮らす結婚移住女性たちの語りと、彼女たちの周囲の社会関係を分析する。

第1章『ムラの国際結婚』の結婚移住女性－農村空間のジェンダーと『ホーム』においては、中山間地（農村）地域における行政主導の「ムラの国際結婚」によるフィリピン女性の移住と居住局面が検討される。結婚移住女性は「嫁」として、家父長制的な空間で不平等な農業労働や再生産労働役割を引き受け、長年過重労働状態にあった。しかしその一方で、姑や家族から農村の社会的営為を継承し、1990年代以降の新しい農村女性の販売活動にも参入していった。加えて、村において形成された社会関係資本をいかし、フィリピンの出身地域とのあいだで出身家族の生業である塩のエスニック・ビジネスを展開し、それにより出身家族との紐帯を強化し安定的な経済支援を実現した者も出てきた。このように結婚移住女性は、農村社会におけるジェンダー非対称な社会的構造に取り込まれながらも、ローカルな生活空間における「ホーム」と、トランスナショナルな空間に拡大した「ホーム」を同時に持ちながら居住してきたことが明らかに

される。

第2章「結婚移住女性の積極的『離脱』－『ホーム』に埋め込まれたジェンダー」では、平野部における台湾女性と韓国女性の「外国人嫁」のライフストーリーを事例に、家父長制的空間における「嫁」という社会的立場を超えて紡がれる、新たな「ホーム」のあり方が検討される。抑圧的な私的領域から「離脱」し、地域の地産地消市場や多文化交流センターへと生活空間を拡張した結果、公的領域において地域の支援者や友人女性と出会い、「嫁」ではない移住女性自身の文化的資源が承認されたことで、精神的な安定と社会的ネットワークである居場所を女性たちは得ることができた。しかしその空間は、実際にはジェンダー非対称な賃金構造が埋め込まれ、また「異文化交流」と称して結婚移住女性たちの文化資本が消費もされ、日本人との境界線を強く意識させられる空間ともなっていた。ここでの結婚移住女性の「ホーム」は、一時的な「離脱」によって新たに獲得されるものであったが、その空間は様々に移住女性を周縁化する軸を内包するものでもあることが明らかにされた。

第3章「居場所をめぐるモビリティネットワークにおける『ホーム』」では、フィリピン出身の結婚移住女性が「ホーム」としてのエスニックネットワークから「離脱」し、さらに他の「ホーム」を持つために移住先社会内部を移動する局面が論じられる。外国人散在地域における重要な空間であったはずの教会では、「嫁」や「母」である結婚移住女性に求められる規範から少しでも逸脱した者は「噂」の標的となり、標的となった女性たちはそこから「離脱」し、次の「ホーム」を構築することになる。こうした複雑なモビリティは、彼女たちが「外国人嫁」であることから居住先社会への適応を強く求められ、それゆえ自ら居住地のジェンダー規範を内面化していくことによって生じていた。こうした複雑な現実を本章では、移住女性が居住局面において常に居心地のいい環境を追い求めるという意味でのモビリティを発揮していることとして、分析される。

終章では、全体の議論がまとめられ、今後の課題も合わせて述べられる。結論として、結婚移住女性は「ホーム」に内在する非対称な権力関係に影響を受けながらも、主体的な行為により複数の居場所をもつことで「定住」する。すなわち、結婚移住女性たちにとっての「定住」とは、精神的な安らぎを得ながら、同時に地域社会の非対称なジェンダー構造の中に取り込まれていくというジレンマを抱えるプロセスなのであった。

以上のように移民研究、ジェンダー研究、国際社会学、フェミニスト地理学といった複数のディシプリンを横断する大野氏の研究は、以下の点において、従来の移民研究や日本における国際結婚研究を大きく刷新するものである。

第一に、大野氏の研究は、これまで滞在期間の長さのみを基準として段階的に把握されてきた「定住」仮説を、結婚移住女性の私的領域、地域社会、そして出身社会との関係の中で、移住女性たち自身がさまざまな制約や規範を時には受け入れ、時にはそれに抵抗しながら、自らの居心地のよい「ホーム」を作り上げていく動的なプロセスとして批判的に再検討している。すでに「定住」仮説については様々な批判がなされてい

るが、大野氏のようにジェンダーの視点から、そして結婚移住女性の経験をもとに「定住」概念を刷新しようとする試みは、これまでほとんどなされてこなかった。

第二に、大野氏の研究は、結婚移住女性を単なる社会統合の「客体」ではなく、「移動する主体」としてとらえ、空間移動と社会的移動を組み合わせた概念である「モビリティ」を、さらに特定の社会関係からの離脱を含む概念にまで高めた、という点でも当該分野への理論的貢献度がきわめて高い。

第三に、しばしば注目されることの多い外国人集住地区と対極にありながら、実際には日本における国際結婚を考える上で重要な場である外国人散在地域としての地方都市および農村をフィールドとし、丹念に語りを集め、まったく新しい「結婚移住研究」を確立したことも、本研究の大きな成果である。

「結婚」移住者であるゆえに、その「家族」「家庭」内の人間関係のみが注目されがちな結婚移住女性が、地域の国際交流や農業および農産物の販売などの経済活動においても重要なアクターであり、そこから私的領域に限定されない「ホーム」が、彼女たち自らの意思によって、さまざまなジレンマを抱えながらも構築され続けている、という現実を、女性たちと地域住民双方への聞き取り調査から詳細に明らかにしている本研究であるが、今後は他の地域との比較や、多義的な「ホーム」概念のさらなる精緻化、そして子どもへの教育戦略を通して移住女性たちのモビリティを考察する必要性など、残された課題も指摘できる。しかしながらこうした課題はいずれも、今後の大野氏の継続的な研究の指針となるものであり、さらなる研究成果が着実に積み上げられることは間違いない。

最終試験においては、本論文の理論的枠組みや、調査データの提示方法等について、審査委員から大野氏に質問をし、それぞれについての的確な回答が得られた。データの提示方法については、外国人散在地域におけるプライバシーの確保という点からも慎重を期したことが明かされ、審査委員一同納得した。理論的枠組みについては、最近の日本における国際結婚研究が必ずしも理論的な刷新を企図しているものが多いことから、本研究の意義があらためて各審査委員から高く評価された。

以上、論文審査および最終試験（口頭試問）において、大野氏の研究の独創性と、当該分野における理論的刷新を成し遂げた高い研究水準が高く評価され、本委員会は全会一致で、当該博士学位申請に係る審査について「合格」との結論に達した。